成人住民の持つ地域の子ども自律イメージに関連する要因
― T町の事例から ―

潟手　遥[1]・下田　倫世[2]・平野　裕子[3]

要　旨

【目的】近年日本において，少子高齢化や地域のつながりの希薄化が進行している．地域住民が子どもを人的資源として期待する度合いを，子どもの「自律イメージ」として測定し，それに関連する社会的・文化的要因について明らかにすることを本研究の目的とする．

【対象と方法】本研究では長崎市T町の自治会長から紹介を受けた20歳以上の自治会加入者717名を対象とし，無記名自記式調査票を配布した．155名の対象者から有効な回答が得られた（有効回収率21.6%）．「自律イメージ」を規定する要因の分析には，ステップワイズ法を用いて重回帰モデルを構築した．

【結果】対象者の平均年齢は58.5（標準偏差:14.3）歳，女性の割合は62.5%であった．自律イメージ得点（レンジ：6-24点）の平均値は14.65（標準偏差:3.21）点であった．重回帰分析の結果，「T町の子どもへの関心」「T町住民の子どもへの接し方（困っているときに相談にのる）」「地域住民に対する信頼度」の順に自律イメージ得点に影響していた．

【結論】T町における子どもの自律イメージは，住民の態度や認識（T町の子どもへの関心の度合い，子どもが困っているときに相談にのること，地域住民に対する信頼度）によって規定されていた．

保健学研究 30：19-27，2017

Key Words　：　地域　子ども　ソーシャル・キャピタル　自律イメージ

（2017年３月８日受付
2017年５月12日受理）

Ⅰ．緒言

現在，日本は核家族化や少子高齢化が急速に進行しているため，地域の関わりや住民との交流の機会が減少している[1]．佐野の研究によると，戦前は家族と地域との緊密性が強く，子どもの行事（ひな祭り等）を家族・親族だけでなく地域の人々が大いに関わり，盛り上げていた[2]．つまり昔は地域のつながりが強く子ども達を地域住民が総出で育てる，いわゆる「子育ての社会化」[3]が出来ていた．しかし現在は地域のつながりが希薄化し，核家族化が進んだことで子育てが家庭の中だけで行われてしまい[4]，「子育ての社会化」が成り立ちにくい環境となっている．この結果，一部の若者・子どもたちには，社会性に欠け，他者への思いやりの心や迷惑をかけないという気持ちが少なく，自制心や規範意識が低い者が現れた[5]．一方，現在の若者・子どもたち（15歳から19歳）の55.3%がボランティア活動に参加したことがある[6]という側面もあり，子どもには自律した存在としての可能性が感じられる．

現在日本は一億総活躍社会の実現を目指しているが，それは子どもも例外ではない．「21世紀の少子・高齢化社会においては，家族の場以外でも高齢者と子どもをはじめとした多世代が共存・協力してコミュニティを形成していくことが緊急の課題になっている」[7]との指摘もしばしば行われるようになってきた．少子高齢化時代において，地域レベルで，大人も子どもも含め，どのように人的資源を活用していくかということを検討することは必至である．

ユニセフの「子どもの権利条約」[8]第18・19・20条にもあるように，一般的には子どもは「大人によって庇護される，依存的な存在」と捉えられがちであるが，子どもには同時に第12・13・14・15条の「参加する権利」も持ち，社会の一員として自由に意見を述べたり，自主的に活動することができる存在でもある．地域社会を構成する中核はそこに生活している人々であるが，著者らは子どもも「自律した存在」として，地域の人的資源になりうると考えた．

そもそも大人は子どもに対してどのようなイメージを持っているのだろうか．もしも人的資源として期待できるような「子どもの自律イメージ」があるのだとしたら，それに関連するのはどのような要因なのだろうか．

1　長崎北病院
2　対馬振興局保健部企画保健課（対馬保健所）
3　長崎大学生命医科学域

子どもを地域社会における人的資源として捉え，地域での子どもの役割の認識を明らかにする研究は，これまでほとんど行われてきていなかった．そこで本研究では，少子高齢化や地域のつながりの希薄化が進むなかで，地域住民が子どもを人的資源として期待する度合いを，「子どもの自律イメージ」を尺度化したものをマーカーとして測定し，それに関連する社会的・文化的要因について明らかにすることを目的とする．

Ⅱ．用語の定義

本研究におけるキーワード及びその定義は以下のようである．

「自律イメージ得点」：Ｔ町住民の学童期の子ども（小学生）がどれだけ自律していると考えるかを，イメージの確立度合で測定した得点．自律したイメージは，「積極的-消極的」，「自律している-依存している」，「能動的-受動的」，「頼りがいがある-頼りがいがない」，「社交的-非社交的」，「好奇心が強い-好奇心が弱い」の計６項目から構成される．これらの項目を尺度化し測定された点数をもって，子どもの自律イメージ得点とした．

Ⅲ．研究方法

１．調査対象

本研究の対象者の在住するＴ町は，長崎市のベットタウンとして30年ほど前に長崎市郊外に住宅造成地として開発された．2016年８月末日現在の人口は1,072名（男534名，女538名），世帯数421戸であり，高齢化率は23.5％（2015年）となっている．本研究では長崎市Ｔ町の自治会長から紹介を受けた，2013年の自治会加入者であり，20歳以上の717名を対象とした．

２．調査方法

本研究では，2013年９月に，上園ら[9]が行った調査データの二次的利用を行った．なお，2013年時の調査実施方法は以下のとおりである．

データの収集はＴ町の自治会を通し，自治会に加入している20歳以上の各個人に自記式無記名調査票を配布した．回収は自治会を経由せず，調査票に同封した返信用封筒にて郵送法で回収した．回答済み調査票の投函により，調査への参加同意を得られたとみなした．調査期間は2013年９月６日から９月30日であった．

３．調査項目

本研究における調査項目は以下のとおりである．調査項目は年齢，性別，居住年数，職業の有無，Ｔ町の子どもへの関心，Ｔ町住民の子どもへの接し方，Ｔ町住民が考える子どもへの望ましい関わり方，一般的な地域活動への関心，地域活動の大切さ，住民同士の付き合いの質，住民同士の付き合いの頻度，ソーシャル・キャピタル，自治会活動への参加頻度である．なお，本研究では，ソーシャル・キャピタルを「地域に対する住民の信頼度」の項目をもって測定することとした．

１）子どもとの関わりの質問の得点

「Ｔ町の子どもへの関心」の点数は（とても関心がある＝１，関心がある＝２，あまり関心がない＝３，関心がない＝４）の点数を与えた．

「Ｔ町住民の子どもへの接し方（①道であったとき声をかける　②一緒に遊ぶ　③困っているとき相談にのる　④良いことをしたのでほめたりご褒美をあげる　⑤悪いことをしたので注意したり叱ったりする）」の各５つの状況について，Ｔ町住民が子どもに対して（よくする＝１，時々する＝２，あまりしない＝３，全くしない＝４）の点数を与えた．

「Ｔ町住民が考える子どもへの望ましい関わり方（①道であったとき声をかける　②一緒に遊ぶ　③困っているとき相談にのる　④良いことをしたのでほめたりご褒美をあげる　⑤悪いことをしたので注意したり叱ったりする）」の各５つの状況についてＴ町住民が子どもに対して（積極的に関わってほしい＝１，ある程度関わってほしい＝２，なんとも思わない＝３，あまり関わってほしくない=４，関わらないでほしい＝５）の点数を与えた．

２）地域との関わりの質問の得点

「一般的な地域活動への関心」には７項目あり，「子育て支援」，「子どもの安全」，「高齢者支援」，「高齢者の安全」，「環境整備」，「地域の安全」，「地域の活性化に関する活動」から成る．それぞれの項目に，（とても関心がある＝１，関心がある＝２，あまり関心がない＝３，関心がない=４）の点数を与えた．

「地域活動の大切さ」では，（とても大切=１，少し大切＝２，あまり大切ではない＝３，大切ではない＝４）の点数を与えた．

「住民同士の付き合いの質」には，（互いに相談したり日用品の貸し借りをするなど，生活面で協力しあっている=１，日常的に立ち話をする程度の付き合いをしている＝２，あいさつ程度の最小限の付き合いしかしていない＝３，付き合いは全くしていない＝４）の点数を与えた．

「住民同士の付き合いの頻度」では，（日常的にしている（～週に数回）＝１，ある程度頻繁にしている（～月に数回）=２，時々している（～年に数回）＝３，めったにしていない（～数年に１回）＝４，全くしていない＝５）の点数を与えた．

「地域住民に対する信頼度」では，（ほとんどの人は信頼できる＝１，どちらかといえばほとんどの人は信頼できる＝２，どちらともいえない＝３，どちらかといえばほとんどの人は信頼できない=４，ほとんど

の人は信頼できない＝５）の点数を与えた．

３）自治会活動への関わりの質問の得点

「自治会活動への参加頻度」では，（毎回参加している＝１，時々参加している＝２，あまり参加していない＝３，参加していない＝４）の点数を与えた．

４）自律イメージ得点

自律イメージは（積極的＝４～消極的＝１，自律している＝４～依存している＝１，能動的＝４～受動的＝１，頼りがいがある＝４～頼りがいがない＝１，社交的＝４～非社交的＝１，好奇心が強い＝４～好奇心が弱い＝１）の６項目の４件法からなる．自律イメージ得点の合計は６～24点である．

４．分析方法

自律イメージの質問項目が内的整合性を持つかどうかCronbachのα係数（α＝0.85）にて検討したのち，下位尺度６項目の各得点を単純加算した．

分析手順は，自律イメージ得点と本研究で取り上げた各変数（Ｔ町の子どもへの関心，Ｔ町住民の子どもへの接し方，Ｔ町住民が考える子どもへの望ましい関わり方，一般的な地域活動への関心，地域活動の大切さ，住民同士の付き合いの質，住民同士の付き合いの頻度，地域住民に対する信頼度，自治会活動への参加頻度），コントロール変数（年齢，性別，居住年数，職業の有無）との関連をt検定，Pearsonの積率相関係数により，それぞれの自律イメージ得点との関係性を分析した．その際，「Ｔ町住民が考える子どもへの望ましい関わり方（悪いことをしたので，注意したり叱ったりする）」では，自律イメージ得点との関連がみられなかったため除外した．上記で得られた結果に基づき，ステップワイズ法を用いて変数選択し，その後コントロール変数を投入し最終的な重回帰モデルを構築した．

また，重回帰分析における変数の選択時には，VIF（分散拡大係数）を用い，多重共線性について問題がないことを確認した．分析にはJMPver.11を用い，有意確率が５％未満を有意差ありとした．

５．倫理的配慮

本研究は長崎大学大学院医歯薬学総合研究科保健学系倫理審査委員会における許可を得たうえで実施した．（許可番号：16060910-2）

Ⅳ．結果

１．基本属性と自律イメージ得点との関連

１）回収結果

回収数は156名（回収率21.8％）であった．そのうち白紙回答の１名を除き，155名（有効回収率21.6%）を分析の対象とした．

２）調査対象者の概要と自律イメージ得点との関連

自律イメージ得点のそれぞれの平均得点と標準偏差の値は，「積極的-消極的」2.49（SD：0.73）点，「自律している-依存している」2.34（SD：0.73）点，「能動的-受動的」2.34（SD：0.66）点，「頼りがいがある-頼りがいがない」2.33（SD：0.65）点，「社交的-非社交的」，2.51（SD：0.72）点，「好奇心が強い-好奇心が弱い」2.67（SD：0.83）点，「自律イメージ得点の合計」14.65（SD：3.21）点であった．

調査対象者の基本属性と自律イメージ得点との関連を表１に示す．対象者は女性が62.5%であった．性別と自律イメージ得点との間には有意な差は見られなかった．

年齢において対象者の平均年齢は58.5（SD：14.3）歳であり，年齢と自律イメージ得点との間に有意な相関が見られ（r＝0.180, P＝0.0341），年齢が高くなるほど，自律イメージ得点が高かった．

居住年数については，平均は19.4（SD：8.2）年であり，自律イメージ得点との間に有意な相関が見られ（r＝0.237, P＝0.0050），居住年数が長くなるほど，自律イメージ得点は高かった．

職業の有無については，「職業無し」が45.8％おり，自律イメージ得点との間に有意な関連が見られ（P＝0.0219），「職業無し」と答えた者の方が自律イメージ得点は高かった．

２．子どもに関連する項目と自律イメージ得点

子どもに関連する項目と自律イメージ得点との関連を表２に示す．

「Ｔ町の子どもへの関心」では，「とても関心がある・関心がある」が61.9％であり，関心が高い者（r＝－0.428, P<0.0001）ほど自律イメージ得点が高かった．

「Ｔ町住民の子どもへの接し方」では，「よくする・時々する」と答えた者は，「良いことをしたので，褒めたりご褒美をあげる」（r＝－0.343, P<0.0001）ほど，「困っているときに相談にのる」（r＝－0.340, P<0.0001）ほど自律イメージ得点が高かった．

「T町住民が考える子どもへの望ましい関わり方」についてでは，「積極的に関わって欲しい・ある程度関わってほしい」と答えた者は，「困っているときに相談にのる」（r＝－0.330, P＝0.0001）ほど，「良いことをしたので，褒めたりご褒美をあげてほしい」（r＝－0.275, P＝0.0015）ほど自律イメージ得点が高かった．

３．地域に関連する項目と自律イメージ得点

地域に関連する項目と自律イメージ得点との関連を表３に示す．

「一般的な地域活動への関心」では，「地域活性化への関心」（r＝－0.366, P<0.0001）が高いものほど，「子どもの安全への関心」（r＝－0.363, P<0.0001）が高いものほど自律イメージ得点が高かった．

表１． 基本属性と自律イメージ得点との関連（N=155）

属性		n	%	平均値	r	*P* 値
性別	男性	58	37.4	14.6		0.7507 [1)]
	女性	97	62.5	14.7		
職業の有無	あり	84	54.1	14.1		0.0219 [1)]
	なし	71	45.8	15.4		
年齢（平均）		58.5（SD14.3）			0.180	0.0341 [2)]
	20-29	8	5.2			
	30-39	7	4.5			
	40-49	23	14.8			
	50-59	31	20.0			
	60-69	47	30.3			
	70-79	30	19.4			
	80-	7	4.5			
	無回答	2	1.3			
居住年数（平均）		19.4（SD8.2）			0.237	0.0050 [2)]
	-9	24	15.5			
	10-14	18	11.6			
	15-19	17	11.0			
	20-24	41	26.5			
	25-29	40	25.8			
	30-	14	9.0			
	無回答	1	0.7			

1） t 検定
2）Pearson の積率相関係数

表２． 子どもとの関わりと自律イメージ得点との関連（Pearsonの積率相関係数）

	n	%	n	%	n	%	r	*P* 値
T町住民の子どもへの関心	とても関心がある・関心がある		あまり関心がない・関心がない					
	96	61.9	47	30.3			−0.428	<0.0001
T町住民の子どもへの接し方	よくする・時々する		あまりしない・全くしない					
⑴ 道であったとき声をかける	132	85.2	20	12.9			−0.251	0.0028
⑵ 一緒に遊ぶ	11	7.0	132	85.2			−0.302	0.0004
⑶ 困っているときに相談にのる	29	18.7	113	72.9			−0.340	<0.0001
⑷ 良いことをしたので，褒めたりご褒美をあげる	45	29.0	100	64.5			−0.343	<0.0001
⑸ 悪いことをしたので，注意したり叱ったりする	55	35.5	92	59.4			−0.290	0.0006
T町住民の子どもへの望ましい関わり方	積極的に関わってほしい ある程度関わってほしい		何とも思わない		あまり関わってほしくない 関わらないでほしい			
⑴ 道であったとき声をかける	139	89.7	6	3.9	1	0.7	−0.261	0.0024
⑵ 一緒に遊ぶ	75	48.4	44	28.4	22	14.2	−0.274	0.0015
⑶ 困っているときに相談にのる	100	64.5	24	15.5	19	12.3	−0.330	0.0001
⑷ 良いことをしたので，褒めたりご褒美をあげる	105	67.7	22	14.2	14	9.0	−0.275	0.0015
⑸ 悪いことをしたので，注意したり叱ったりする	131	84.5	6	3.9	5	3.2	−0.086	0.3330

「地域活動の大切さ」では，「とても大切である・大切である」が91.6％であり，地域活動を大切であると考えている者（r＝－0.281, P＝0.0011）ほど自律イメージ得点が高かった．

「住民同士の付き合いの質」では，「日常的に立ち話をする程度の付き合いをしている」以上の者で56％以上であった．住民同士の付き合い方の質が密である（r＝－0.269, P＝0.0018）ほど自律イメージ得点が高かった．

「住民同士の付き合いの頻度」では，年に数回以上の付き合いをしている者が約80％であった．近所付き合いの頻度が多い者（r＝－0.231, P＝0.0078）ほど自律イメージ得点が高かった．

「地域住民に対する信頼度」では「とても信頼できる，信頼できる」が60.0%であり，地域住民に対して信頼度が高い者（r＝－0.354, P＜0.0001）ほど自律イメージ得点が高かった．

4．自治会に関連する項目と自律イメージ得点

自治会に関連する項目と自律イメージとの関連を表3に示す．

「自治会への参加頻度」では，「毎回参加している，時々参加している」が65.2%であり，自治会活動へ参加する頻度が高い者（r＝－0.305, P＝0.0005）ほど自律イメージ得点が高かった．

5．多変量解析（重回帰分析による自律イメージ得点と関連する要因の分析）

重回帰モデルを用いて，独立変数をステップワイズ法により抽出した項目とコントロール変数を投入し，従属変数を自律イメージ得点として関連の強さを明らかにした．分析の結果を表4に示す．

分析の結果として調整済みR^2が0.234を示し，「T町の子どもへの関心」（β＝－0.244, P＝0.0145），「T町住民の子どもへの接し方（困っているときに相談にのる）」（β＝－0.202, P＝0.0226），「地域住民に対する信頼度」（β＝－0.184, P＝0.0442）の順に自律イメージ得点に影響していた．

「一般的な地域活動への関心」は自律イメージ得点と有意な関連を示さなかった．

表3．地域及び自治会活動との関わりと自律イメージ得点との関連（Pearsonの積率相関係数）

項目	n	%	n	%	n	%	r	P値
一般的な地域活動への関心	とても関心がある・少し関心がある		あまり関心がない・関心がない					
(1) 子育て支援	100	64.5	52	33.5			−0.316	0.0002
(2) 子どもの安全	139	89.7	13	8.4			−0.363	<0.0001
(3) 高齢者支援	137	88.4	17	11.0			−0.184	0.0311
(4) 高齢者安全	140	90.3	14	9.0			−0.229	0.0069
(5) 環境整備	142	91.7	13	8.4			−0.271	0.0013
(6) 地域の安全	145	93.5	10	6.5			−0.191	0.0243
(7) 地域の活性化	117	75.5	38	24.5			−0.366	<0.0001
地域活動の大切さ	とても大切・少し大切		あまり大切ではない・大切ではない					
自治会・子供会・老人会について	142	91.6	6	3.9			−0.281	0.0011
住民同士の付き合いの質							−0.269	0.0018
(1) 生活面での協力	18	11.6						
(2) 日常的な立ち話程度の付き合い	71	45.8						
(3) あいさつ程度最小限の付き合い	57	36.8						
(4) 付き合いはない	1	0.7						
住民同士の付き合いの頻度							−0.231	0.0078
(1) 日常的にしている（～週に数回）	35	22.6						
(2) ある程度頻繁にしている（～月に数回）	39	25.2						
(3) 時々している（～年に数回）	47	30.3						
(4) めったにしていない（～数年に一回）	18	11.6						
(5) 全くない	9	5.8						
地域住民への信頼度	とても信頼できる・信頼できる		何ともいえない		あまり信頼できない・信頼できない			
（ソーシャルキャピタル）	93	60.0	52	33.5	3	1.9	−0.354	<0.0001
自治会活動への参加頻度	毎回参加あり・時々参加あり		あまり参加なし・参加なし					
	101	65.2	38	24.5			−0.305	0.0005

表４．Ｔ町住民の子どもの自律イメージ得点を規定する社会的・文化的要因

項目	標準偏回帰係数	*P* 値
性別	−0.041	0.6343
年齢	−0.127	0.2492
居住年数	0.130	0.1715
職業の有無	−0.121	0.2160
一般的な地域活動への関心（地域の活性化）	−0.105	0.2823
Ｔ町の子どもへの関心	−0.244	0.0145
Ｔ町住民の子どもへの接し方（困っているときに相談にのる）	−0.202	0.0226
地域住民に対する信頼度（ソーシャルキャピタル）	−0.184	0.0442
R^2	0.287	
自由度調整済み R^2	0.234	

Ⅴ．考察

本研究の結果は，「子どもの自律イメージ」を規定する要因として「Ｔ町の子どもへの関心」，「Ｔ町住民の子どもへの接し方（困っているときに相談にのる）」，「地域住民に対する信頼度」が有意に関連していることが明らかになった．

「Ｔ町住民の子どもへの接し方（困っているときに相談にのる）」という項目は，子どもとの実質的な接触の現状，「Ｔ町の子どもへの関心」は，子どもとの接触の前提となる個人の姿勢を指している．つまりいずれも子どもとの接触の現状に関して，共通した背景を持っていると考えられる．子どもとの接触の現状と「子どもの自律イメージ」との関連についていえば，ある集団の他の集団に対する社会関係において感じられる同情的な理解（親近性）の程度を表す社会的距離[10]は，対象とのより多くの接触体験を積むことで，受け入れが好意的になることが示されている[11]．従って，子どもと接触することで親近感が強まり，好意的な態度となることが考えられる．

大島[12]によれば，精神障害者のような社会的マイノリティ[13]に対して，それらの人々の相談にのるといった主体的な関わりを持つ者ほど，社会的マイノリティとの社会的距離がより縮まり，地域の中で共に暮らすことに対して好意的で受け入れが良いことが示されている．社会的距離を縮めるということは，直接的な関わりの中から，相手をよく知ることを通して相手に対する受け入れの度合いを高めることであるから，このことは理論上，相手が子どもでも当てはめることができると考えられる．従って，本研究の結果は子どもへの関心をもったり，相談にのるなど子どもへの直接的接触をはかることで，社会的距離が縮まり，受け入れやすくなるために子どもに対する親近感を高め，好意的な良いイメージつまり自律イメージを持つことに関連すると考えられる．

一方「地域住民への信頼度」が高いほど「子どもの自律イメージ得点」も高くなっていた点については，以下のように考察する．ソーシャル・キャピタルに関する理論化を行ったパットナム[14]は，今日のアメリカの社会現象として，『昔は「私たちの子ども（our kids）」といったときは町に住む子ども全員を指していた．しかし現在では，その言葉が指す対象が狭くなり，自分たちの生物学的な子どもだけになった．その結果，社会全体で子どもを育てるという意識がなくなった』ことを問題視している．これはソーシャル・キャピタルの衰退化を意味しており，現代の日本においても同様の問題[15]が起こっている．

このことは逆に，パットナム[16]や草野ら[17]も述べているように地域住民同士の関わりが増えて地域内のつながりが深まり，ソーシャル・キャピタルが充実することで，社会全体で子どもを育てる環境になる可能性を示している．そうすると他人の子どもが「私たちの子ども」となり，子どもへの関心が高まり，それが子どもが困っているときに相談にのるといった行動につながっていくのではないだろうか．言い換えれば，子どもへの関心の高さや，子どもが困っているときに相談にのるという行為には，その根底に子どもに対する信頼があるといえる．本研究で用いたソーシャル・キャピタルの測定尺度は，「子どもに対する信頼度」ではなく「地域住民に対する信頼度」を測定していたが，地域住民に対する信頼感があるからこそ，地域の一員としての子どもに対しても信頼感を持ちやすく，今後の地域を担う自律した存在としてのイメージを確立しやすいと考える．その根拠として，本研究の調査を行ったＴ町の住民のインタビューによると，「子どもは地域の中で過ごす時間が長いため，地域の中で社会性を身につける教育をしていきたい」との発言があり，大人が子どもに積極的に関わる姿勢が示された．さらに「（子どもたちの）親に信頼があれば，その子どもたちにも信頼が持てる．信頼があるからこそ，子どもたちは（与えられた役割を）やれると思う．地域の中では子どもの存在は大きく，子どもも積極的に動いてくれるから地域活動の一員として期待している．これからは子どもも一人前扱いしていいと思うので，（子どもたちには）役割を与えて，大人もサポートをしていきたい．」という発言がみられた．実際にＴ町では子どもたちが自主的に独居高齢者のごみ捨てを手伝った

り，積極的に公園の清掃を行うなど子どもたちの自律性が高い行動がみられるが，これをふまえて地域住民も子どもに対して地域活動の一員として期待していること，またさらに子どもの自律性を高めようとする思いがあることもうかがえた．このことから地域住民に信頼感があるからこそ，その子どもに対しても信頼を持ちやすく，子どもも地域の一員として今後を担う自律した存在としてのイメージを確立しやすいことがうかがえる．

また，本研究では自治会活動の参加頻度が多いほど，自律イメージ得点が高いこと，そして地域住民への信頼度も高くなるほど，自治会活動への参加頻度が多い（$r=0.293$，$p=0.0005$）ことも明らかになった．このことから，地域住民及び子どもに対する信頼度が高まり住民同士の関わりが増えるほど，子どもを地域を担うための人的資源として頼れる存在と見ることができると考えられる．

実際に内閣府国民生活局の調査[18]によるとボランティア・NPO・市民活動に参加している人達は，地域活動に参加していない人と比べて，人を信頼できると思う人が相対的に多く，近隣でのつきあいや社会的な交流も活発な傾向にあることが示された．これは住民に対する信頼度も高まることで，住民同士の関わりが多くなることを示しているが，このことは，子どもとの関係性においても言え，子どもに対する信頼があることで関わる機会が増え，より子どもとの交流が深まると考えられる．

また今村ら[19]は子どもは親だけでなく，広がりのある地域コミュニティの一員として見守られ育つことが望ましいと述べている．よって今後は，子どもを含む地域住民同士がお互いを知る機会や，信頼感を高め合う機会をつくるために，大人と子どもが直接的なかかわりを持つことができる場，例えば夏祭りのような多世代が交流できるイベントなどをもっと作っていくことが必要であると考える．

Ⅵ．本研究の限界

本研究では自治会長から紹介を受けた20歳以上のＴ町自治会加入者を対象としたため自治会未加入者は調査の対象外となった．また，対象者の平均年齢が58.5歳と高く偏っていること，調査票の回収率が21.8%と低いこと，Ｔ町は報道など[20]で取り上げられるなど，地域活動が活発であり住民同士の交流が頻繁に行われているといった特殊性のようなサンプリングバイアスがかかっていることが考えられる．今後は，当該地域の全住民を対象とした調査を行うことや複数の地域間での比較を行うことで，さらに研究を深めていくことができると考える．

Ⅶ．結論

本研究では長崎市郊外に位置するＴ町における成人住民を対象とした，2013年に実施した研究を二次利用し再分析を行い，子どもの自律イメージに関連する要因を明らかにした．その結果「Ｔ町の子どもへの関心」「Ｔ町住民の子どもへの接し方」「地域住民に対する信頼度」が子どもの自律のイメージを規定していた．

謝辞

本研究に参加いただきました，Ｔ町自治会の皆様及び地域住民の皆様に深く感謝申し上げます．

引用文献

1）厚生労働省：平成28年度版厚生労働白書，日経印刷，東京，2016：46-80.
2）佐野　茂：家庭生活における「一家団欒」の社会史的考察（3）−土雛人形を中心とした庶民家庭における三月節句の教育的意義−，梅光大論集，24，131-140，1991.
3）山口のり子，尾形由起子，樋口善之，松浦賢長：「子育ての社会化」についての研究　−ソーシャル・キャピタルの視点を用いて−．日公衛誌，60（2）：69-76，2013.
4）池　弘子、山根律子：子どもの福祉，ぎょうせい，東京，2004，5-10.
5）文部科学省：子どもの徳育の充実に向けた在り方について（報告）．文部科学省，http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1286155.htm（2017年４月５日アクセス）
6）内閣府大臣官房政府広報室：生涯学習に関する世論調査-集計表15．内閣府，http://survey.gov-online.go.jp/h17/h17-gakushu/4.html　（2017年４月５日アクセス）
7）草野篤子：インタージェネレーションの必要性，現代のエスプリ，444：5-8，2004.
8）ユニセフ：子どもの権利条約．ユニセフ，http://www.unicef.or.jp/about_unicef/about_rig_all.html　（2016年10月28日アクセス）
9）上園美澄，窪田祐也，福島香織，平野裕子：T町住民の子ども・自治会・近隣住民との関係に関する意識―対象者の居住家族形態の比較を中心に．保健学研，27：35-43，2015.
10）濱島朗，竹内郁郎，石川晃弘：社会学小事典，有斐閣，東京，1982，163.
11）栄　セツコ，小澤　温，岡田　進一，白澤　政和：精神保健ボランティアとコミュニティづくり．大阪市大生活科紀，45：243-252，1997.
12）大島巌：精神障害者に対する一般住民の態度と社会的距離尺度．精神保健研，38：25-37，1992.
13）武藤麻美：社会的距離の構造に関する研究－マイノリティや国家に対する社会的認知の分析を通して．大阪大学 人間科学研究科 社会心理学研究室，博士論文：2015.

14）Putnam RD: Our kids, The American dream in crisis. Simon & Schuster Paperbacks, New York, 2015:258-260.
15）藤本健太郎：孤立社会からつながる社会へ－ソーシャルインクルージョンに基づく社会保障改革．ミネルヴァ書房，京都，2012，2-12.
16）ロバート・D・パットナム著　柴内康文訳：孤独なボウリング－米国コミュニティの崩壊と再生，柏書房，東京，2006，375-390.
17）草野恵美子：乳幼児を育てる母親の「近所づきあいの程度」がその地域における「子育てのしやすさ感」に及ぼす影響．大阪医大看研誌，3：10-17，2013.
18）内閣府国民生活局 市民活動促進課：平成14年度ソーシャル・キャピタル－豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて－p.3．内閣府．https://www.npo-homepage.go.jp/uploads/report_h14_sc_gaiyou.pdf（2017年４月５日アクセス）
19）今村晴彦・園田紫乃・金子郁容：コミュニティの力－“遠慮がちな”ソーシャル・キャピタルの発見，慶應義塾大学出版会，東京，2010，110-114.
20）中國新聞：担い手　自治会活動が命綱　子ども軸　親世代呼ぶ．中國新聞．http://www.chugoku-np.co.jp/column/article/article.php?comment_id=140&comment_sub_id=0&category_id=244（2016年11月29日アクセス）

A study on the image of independency of children : through a survey of adult residents of T housing complex

Haruka GATADE[1], Michiyo SHIMODA[2], Yuko Ohara-HIRANO[3],

1 Nagasaki Kita Hospital

2 Tsushima Healthcare Office

3 Institute of Biomedical Sciences, Nagasaki University

Received 8 March 2017
Accepted 12 May 2017

Abstract

The independency of children indicates the degree of independence in children's behavior and is necessary to acquire the social role of being a human resource in communities. Its conceptualization is a prerequisite, especially in the "Engagement of All Citizens" project under the Abe Cabinet. This study aims to obtain basic data that may contribute to the policy of how to develop the children's role in community settings. An anonymous questionnaire regarding the image of independence of children measured by an original self-rated scale was distributed to adult residents of T housing complex, located in a suburb of Nagasaki City. One hundred and fifty five respondents (response rate: 21.6%) answered the questionnaire. To investigate the construction of the image of children's independence, a multiple regression model was applied using a stepwise method for choosing independent variables. The results indicated that the strongest indicator of scores for the image of children's independence was "degree of interest toward children of T housing complex" (beta=-0.244, p=0.0145), followed by "degree of assisting children who are in need" (beta=-0.202, p=0.0226) and "degree of reliability towards T community residents" (beta=-0.184, p=0.0442). The results also indicated that the degree of interest in and contact with children is a key indicator of the image of children's independence. Interestingly, the degree of reliability of the local community is also considered an indicator of the image of children's independence. Thus, the reliability of the local adults can be transformed into the reliability of the children residing in the same community.

Health Science Research 30 : 19-27, 2017

Key words : Community, children, social capital, image for autonomous behavior